

---

# 蓮華～renka～

なな☆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蓮華／renka／

### 【Nコード】

N3835B

### 【作者名】

なな☆

### 【あらすじ】

あたしの名前はアイ。高校を卒業して、大学生活が始まるまでの3ヶ月間、とくにすることもなく、その時ちようど弟がやっていたオンラインゲームというものを教えてもらう。あたしは、そのゲームの中で出会ったレンに恋してしまった。この話は全てノンフィクションです。

## ☆出会い☆

今は夜の11時。

あたしはベッドに寝転がって、パソコンにむかっている。  
やっているのは、オンラインゲーム。

12月頃に弟から教えてもらって、それから半年経った今でも、  
未だにハマったまま。

最初は、意味もやり方も分からなくて、ヒマがあったらやる程度。  
しかし、ゲーム内で知り合った1人の男によって、  
あたしは毎日のように、このゲームをするようになった。

その人に出会ったのは、年明け前の29日くらいだっただろうか。  
なんとなくやり方が分かって、慣れてきた頃。

無知なあたしに、色々と教えてくれた優しい人だった。

ゲームにINしたときは毎回連絡をとって、お互いに何でも話せる  
仲に

なってきた頃、あたし達はアドレスを交換してメールをするように  
なった。

彼の名前はレン。歳は、あたしの4つ上。

あたしは、毎日メールをしているうちに、レンに好意を抱くように  
なっていた。

「レン、大好きだよっ（＊＾▽＾＊）」

「俺もアイが好きやで★」

お互いに、好きって言葉を言い合っているけど、  
広島のあたしと大阪のレンでは遠すぎて、ほぼ擬似恋愛になっていた。

あたしはこの時、本当にレンのことが好きだったが、

実際ちゃんとした彼氏がいたし、そのことを知っているレンが、本気で自分を好きだと言ってくれているのか、わからなかった。ただ、あたしは4月から、大阪の大学に行くことが決まっていたので、  
遠恋になってしまう今の彼氏とは3月頃バイバイして、  
また大阪で恋愛をするため、レンをキープにしていたのかもしれない。

## ☆ライバル☆

「アイ、聞いてよ」

落ち込んでいる様子のルイ。

ルイもゲームの中で友達で、元々はレンの友達だったが、3人で行動しているうちにあたしも仲良くなった。

もちろん顔は分からないが、喋り方も行動も男っぽくて、頼れるカッコイイ存在だった。

最初会った時に、男だと勘違いしてしまったくらいだ。

そんなルイと、なぜか恋愛の話になって、

しかもいきなり相談なんてされてビックリした。

やっぱ女なんだな〜って、初めて実感したときだった。

ルイはあたしより5つも年上で、すでに結婚もしてるって聞いていたから、

どんな相談なんだろうって、ドキドキしてた。

「実は、レンのことずっと好きだったんだ」

・・・えっ。

ルイは、今のダンナとうまくいってないことを話してくれた。

お金をためたら離婚して、レンのところに行きたいって。

ダンナとは、セックスレスで、離婚の話もほぼ決まっている状態らしい。

正直、なんて言えばいいかわからなかった。

ルイはあたしの気持ちも知らず、話し続けた。

レンのことを、命の恩人って言ってた。

何度も自殺を考えていたルイは、毎回レンの言葉で救われてた。

「辛くても、死ぬことだけは考えるなよ」

「生きる目的が分からないなら、俺のために生きろ」

そうやって優しい言葉をかけてもらって、救われてた。

誰だって、そんなこと言われたら期待しちゃうよ。

もしかしてレン、色んな人にそんなこと言ってるの？

あたしは泣きそうなのを必死に堪えた。

「ねえ、アイ？」

自分の名前がパッと画面に表示され、我に戻る。

「もしかしてアイもレンのこと好き？」

ふいにそんなことを聞かれて、あせった。

「いや、あたしの中でレンは頼れるお兄さんって感じかな」

本当のことが言えなかった。

あたしの今の一言で、ホッとしているルイを見たら、なおさら。

胸がギュッと締め付けられる。

辛い、辛い、どうしたらいいか分からない。

ルイは、あたしがレンと会おうもつと前からレンのこと想ってて、あたしの知らないレンもいっぱい知ってて・・・

ゲームを切って、すぐにレンに電話をした。

「もしもし、どした？」

レンの声を聞いた途端、涙があふれだした。

「ルイが、ルイがね、レンのこと・・・」

泣き声で自分でも何を言ってるのか分からないくらい。

ちゃんと喋れてなかったが、レンは静かに聞いてくれていた。

レンは、ルイが自分を好きだということを、知っていたらしい。

あたしは、レンがルイに取られるかもしれないと思って、

不安でしかたなかった。

「ルイが俺のこと好きってゆっても関係ないやんツ」

鼻水をすすりながら、レンの声に耳を傾ける。

「好きってゆわれても俺の気持ちが変わるわけやないし、俺はアイが好きやで？だから心配せんでいいやん☆」

レンのその言葉を聞いて、少し安心した。

たった一言、「好き」って一言、それだけであたしの不安はなくなった。

・・・よかった。

あたしは、レンの言葉を信じて、電話を切った。

## ☆不信☆

その後も、3人は今まで通り仲良くやっていた。

でもやっぱり、レンとルイが2人で一緒に行動しているのを見ると、不安だったし嫌だった。

「やだッ」って言うと、レンはあたしのところにきてくれて、安心させてくれた。

卒業式も終えて、ほぼ毎日ヒマになったあたしは、ゲームをする時間にも

前に比べて断然増えてきた。

しかし逆に、最近レンもルイもIN時間が短くなっていたり、INしていい状態が多くなった。

2人、どっちともがいないだけで、今電話したりしてるんじゃないだろうかと、

会ったりしてるんじゃないだろうかと、少しのことでもすぐに不安になってしまふとこまで、あたしは精神的にやれられてきていた。

そんな時、相談にのってくれるのが、ショウだった。

レンに、ゲーム内の人にアドレス聞かれても教えるなよって言われてたけど、

レンだってルイと連絡とってるくせに、と思ってやけくそで交換した。

約束を破りたくなかったが、レンとルイが夜中に電話をしているというのを

ショウから聞いて、レンに裏切られてることを知ったの行動だった。ルイとショウは仲良しで、よく相談し合ってるらしかったので、

あたしは、ルイの情報をショウにもらっていた。



あたしにとってルイは、恋のライバルであるということもあって、クライだと思うようになってきていた。

それに、レンのことを好きと言いながらも、ショウに自分の裸の写メを

何通も送ったりしていたらしい。

レンを好きなのに、ショウに対しても誘惑？

ありえないと思った。

まさか、ちひろにも送ったりしてるんだらうか。

3日、4日と、レンもルイも全然ゲームにINしてない。

レンにメールをしてみても、返信がない。

心配になりかけていた1週間後くらいにメールがきた。

パソコンが壊れて、ずっとできなかつたらしい。

新しいパソコン買うまでは、メールのみで、一緒にゲームしたりはできないけど、連絡とれるだけでも嬉しかった。

それから少しして、ルイもまたINするようになった。

INしてることは知ってたが、特に会話もなかったので話しかけなかった。

すると、ルイの方から話しかけてきた。

「報告がある」って、すごい嬉しそうに。

レンのことかなって思いながら、とりあえず聞いてみる。

「実は、ゲームしてない間、レンと会ってた☆」

言われた瞬間、頭が真っ白になった。

まさか、こんなことを言われるだなんて思ってなかった。

レンに会いに大阪に行って、レンの実家に泊まった、タマゴ焼きがすごい上手かった、水族館に行った、エッチした・・・。

嬉しそうに、詳しく全部話してくれる。

「よかったじゃん、おめでとッ☆」

心にもない言葉。

「俺はアイが好きやでっ」

思い出す、あのときのレンの言葉。

何を信じればよかったの？

なんで言っただけに、こんな裏切るようなことしたの？

怒りと、悲しみと、いっぱいいっぱいになって、また涙がこぼれた。

ルイと話したあとに、ショウからも聞いた。

2人が会ったこと。

ルイが言ったのか、レンが言ったのか、分からないけど・

もうそんなこと、どうだっていい。

どうしたらいいのか、わけわかんない気持ちでいっぱい。

「ルイと連絡とってる？」

「とってないで☆」

とりあえず、探りのメールをいれる。

もしかしたら、本当のことを話してくれるかなって思って。

「会ったとかしてないよね（＜|＞）？」

「してないって☆」

最後の最後まで、レンのこと信じようとしたのに。

やっぱりもうだめだ、信じられない。

あたしは、もう返信せずにケータイを閉じた。

何日かして、

「なんで最近メールくれんのん(T|T)」  
ってメールがきた。

あたしは、本当のこと、聞いたこと全部を話すことを決心した。

「レンさー、ルイと会ったんぢやろ？」

そう送ったあと、なかなかメールが返ってこない。

ルイに、「オマエ会ったことゆったん？」とかって電話してるのか  
どうなのか・・・。

少し時間が経ってから、「なんで？」ってきた。

どこまで言わないつもりなんだろう。

「本人に聞いたから」

ルイに、内緒って言われなかったし、そのままを言った。  
するとすぐに、「ゴメン(<|>)」ってメール。

謝るんだったらするなよ、って思いながら、また涙。

まさかこんな風に裏切られるとは思わなかった。

「もう信じられないから」

そういつて終わりにしようとした。

やっぱりレンは、あたしのこと本気じゃなかったのかな。

そのあと何回か謝罪メールみたいなのが続いて、

「もう絶対しない。また信じてもらえるように頑張るッ」  
ってきた。

もう絶対に許さないって決めたのに。

好きになったら、やっぱり負けなのかな。

「わかった、態度で示して」

結局は最後に許してしまった。

思えば、あたしはレンと付き合っているわけではない。

お互いに好きって言ってるけど。

あたしは、付き合ってるという、形だけでもほしかった。

実際に会えなくても、会わなくても、疑似恋愛なんだから、適当に  
でも

付き合おうって言われたかった。

愛されていないのか・・・。

レンの突然の裏切りには相当こたえた。

あたしの中では、もう付き合っているような気分だったから。許したのは許したが、この時もうレンのことは冷めてきていた。

それから、レンとのメールもめんどくさくなってきた。

でも、レンのことが心のどこにもないわけでもなかった。

ルイと話すことも嫌で、ずっとショウと一緒に行動をしていた。

ショウは、あたしにとってすごく心地いい場所だった。

## ☆心変わり☆

最近、シヨウとばかり連絡をとるようになってきた。

レンとも一応とっているが、シヨウとのメールの方が楽しいし、何よりもラクだった。

そんなときに、突然の告白。

「会ったりはできないけど、付き合おッ」

迷った。

正直、心の中にはまだレンがいる。

こんな状態で付き合っても、傷付ける結果になるだけかもしれない。

「俺は絶対に浮気なんかしないよ」

あたしだけを見てくれる人と付き合いたかった。

もう、あんな思いは絶対したくなかった。

レンとのことを忘れるために、シヨウの告白を受けた。

実際に付き合ってる彼氏のことは別に好きじゃなかったし、

当分会ったりしてないし、自然消滅を待ってる状態だったので、シヨウには内緒にした。

毎日のようにかけてくれる電話。

レンがしてくれなかったことを、シヨウはしてくれる。

あたしはどんどんハマっていった。

レンが、パソコンを買って、ゲームにまた戻ってきた。

でも特に、一緒に行動をしたりはしなかった。

シヨウが嫌がってたし、そうゆう気持ちはよく分かってたから。

ルイは、レンがゲームに復帰してきたのと同時に、引退した。

レンが他の女と話したりしてるの見てたら辛いからという理由。

レンは、あたしのことが好きだということを、ルイに少しゆっていたらしい。

あたしのせいかな、と思ったが、とめなかった。

いなくなつて、ちょっとホッとしてしまった自分がいた。

それから少しして、レンもゲームをしなくなった。

ルイと同じような理由。

「アイが他の男といふのやだ、見たくないから」

本当なのか、どうなのか。

そう思ってくれるのは嬉しかったが、とめなかった。

何日間かメールはしていたが、どちらともなくメールは途切れていた。

ずっとシヨウと一緒にゲーム。

でも、親の部屋にあるパソコンを使っていたあたしは、

夜遅くまでゲームをすることができなかった。

ゲームを切ったら電話。電話を切ったら連絡なし。

シヨウはあたしよりもゲームを優先する人だった。

ゲームしている間はメールをくれないので、シヨウからのメールの回数は減っていった。

これが唯一の欠点だった。

1週間もしないうちに、ルイが復帰していた。

引退したんじゃないかったのか。

レンがいなくなつたことを知って、戻ってきたのだろうか。

「アイ、レンには気をつけなよ」

いきなり何を言われるかと思ったら。

ルイは怒りをあらわにしながら、あたしに語ってきた。

聞いたところ、レンに騙されたとか。

会って遊んだりしたときのお金は、全てルイが払ったらしい。

それどころか、レンが買ったとゆっていたパソコンは、本当はルイからのプレゼントだったらしい。

総額、何十万だろうか・・・。

あたしは、その時点で、レンありえないって思ってたけど、ルイは、「でも好きな人のためだったから、別にいいって思った」ってゆう。ルイが大阪から帰った何日か後に、プレゼントのパソコンがレンに届いたらしい。

レンはルイに取り付け方など色々聞いて、ネットが繋がった次の日に、

「やっぱりアイのことが好きだからバイバイ」

と言って連絡を切ったらしい。

ルイは、レンにとって都合のいい女になってしまったのだ。

まさかそんなことするような人だと思わなかった。

あたしの中での、レンのイメージがどんどん崩れていった。

## ☆恐怖☆

レンがいなくなってから、ルイはショウにベツタリだった。

あたしとショウの関係のことは内緒にしていたので、仕方ないけど、それを見たくなくて、あたしは他の友達を作って、一緒にいた。

高1の、ノン。中2のモト。

あたしは、2人からも好きと言われていたが、ショウとの関係も言えずに、

2人には曖昧な返事をしていた。

ノンとも、モトともアドレスを交換して、毎日メールや電話をした。連絡をとっているうちに、2人に気持ちが揺れることもあった。

実際、ノンに「好きだよ」ってゆったりしていた。

同じように優しくして、でもショウとは反対で、ゲームよりもあたしを優先してくれていて、

そこに少し惹かれてしまったのかもしれない。

モトとは一緒にいて楽しかったが、年下すぎて恋愛対象にはならなかったので、

相変わらず曖昧な態度を繰り返していた。

夜、寝ついた頃に、ケータイが鳴った。

モトからの電話だった。

あたしは、寝ぼけながら電話に出た。

いつもながらハイテンションなモトの声。

「アイ、好きやで〜♪」

「うん、ありがとう」

・・・

眠たくて、意識飛んだ。

途中からの記憶があまりない。



ケータイ片手に、そのまま寝てしまったらしい。  
新着メールがきていた。

「アイ途中で寝ちゃった（＜Ａ＞）でも好きってゆってくれたの嬉しかった☆」

・・・ヘッ？

なぜかあたしは、モトに対して好きって言ってしまったらしい。  
返信はせず、ケータイを乱暴に置いて、ベッドから降りた。

3月の終わり頃。

そろそろ大阪の方に引っ越す。

レンと近くなる。

会う気はないけど、やっぱり気になってしまう。

シヨウは、あたしがレンと会わないか、不安らしい。

「大丈夫☆あたしは絶対にレンみたいなことしないもんっ☆」

そう、レンとルイみたいなこととして、シヨウを傷つけたりしない。  
あたしは力強く、シヨウに言った。

引っ越しの準備で、なかなかINできない日が続いた。

とりあえず、シヨウ・ノン・モトの3人とは相変わらずメールをしている。

大阪への引っ越しが近いこともあって、久々にレンからもメールがきた。

「早く大阪おいでな☆んで会おッ（＾ー＾）」

この言葉は嬉しかったけど、会うことは絶対にないと思った。  
きっと、どこかで出会ってしまうこともないだろう。

「うん☆会おうねッ（＜Ａ＞）」

その気は全くなかったが、毎回こう返事した。

4月に入って、やっと落ち着いた。

大阪には、親と、1番仲のいい友達の、ゆいと一緒にきた。

掃除したり、家具を取り揃えたり、色々手伝ってもらった。

親は1泊、ゆいは3泊して、広島に帰っていった。

ここからが本当の一人暮らしになる。

まだ、テレビの接続をしてもらってなかったので、やることと言ったら、

パソコンでゲームか、コンポで曲を聴く程度だった。

久しぶりにするゲーム。

今までデスクトップでやっていたので、ノートパソコンは難しかった。

でも、これからは好きなだけ、できるんだ。

レンからメールが来ても、返さなかった。

毎回「会おう」ってゆわれて、断るのもめんどくさくなったからだ。けど、一人暮らしは思った以上に寂しくて、自分からちひろにメール。

何日か待ったけど、返信はこなかった。

彼女ができたのか。

あたしとのメールに飽きたのか。

大学にも慣れてきた頃、色んなことが起こり始めた。

「モトに好きってゆったの本当？」

なんで知ってるのか、シヨウに問い詰められる。

寝ぼけてて、あまり記憶に残ってないことを言うと、それでもモトは勘違いしてるから、

あれは違うってことを説明しておいて、と言われて、しぶしぶメールをする。

「今から電話いい？」

「いいよっ（へーへ）」

モトは中学生でケータイないから、家の電話にかけなければならなかったため、

電話するときは確認が必要だった。

あたしは、ちゃんと説明して、謝った。

なぜか涙も出てきて、必死にゴメンねってゆった。

モトは、全然いいよって、笑顔で許してくれた。

これで、一件落着だと思っていた。

しかし、次の日、モトからのメールで「自殺する」ってきた。

あせって返信する。

今夜0時に自殺するって。

理由を聞いたら、色々嫌なことあって、恋愛とか親とか友達とかからしい。

「恋愛だってもう何信じたらいいかわかんないや」

って、まるで遠まわしに、「アイのせい」ってゆってるよう。

あたしはずっと説得してたけど、0時になる2分前くらいに「バイバイ」って言われて、

そこでメールは途切れた。

ただ、かまってほしかっただけなのか。

ただ、フラれた腹いせなのか。

それであたしに嫌がらせをしようとしているのか。

そう考えながらも、自殺するといっていた言葉を半分信じていたあたしは、

自分のせいなんだと責めて、泣き崩れた。

どうすればいいか分からずに、泣きながらショウにメール。

ショウがルイにメールで聞いてみたら、ルイからあたしにメールがきた。

「モト、アイに嫌がらせするために。自殺ウソだって」

ルイは事前に知っていたけど、言わないでってゆわれて、どうしようか迷ってたらしい。

どうせゆってくれるんだったら、事が起こる前にゆってほしかった。あたしが、曖昧な態度とって、期待させてたのに、告ったらフラれたから、っていう理由でやったらしい。

確かにあたしは、そうゆうことしちゃったし、やっちゃった。だから、あのとき、電話かけて謝ったのに。

悪かったなって思っ、あのとき、ちゃんと謝ったのに。フラれた腹いせとかありえない。

次の日、モトからメールがきた。

「おはー、なにしてるー？」

まるで何もなかったかのような内容。イライラする。

あたしは返信しなかった。

「昨日は自殺するってゆったら必死で止めてくれたのに、未遂だっ、て分かったらムシかよ。」

もうオマエ死ね、俺も死ぬし」

だるいながらも返信。

そしたら、親にバレて、自殺未遂で終わって今入院だとか。ルイから本当のこと聞いてるから、ウソって知ってるから、だるい。としか思わなかった。

途中からメールがなくなって、夕方からまた再開。

「血が足りなくて倒れてた」

・・・どう考えても、時間的に学校行ってたんだろ、って感じ。

本当は、今すぐにでもメールをやめてしまいたかった。でも、今やめたらまた次なにをやらかわからない。

あたしの個人情報流されたらどうしよう。

あげた顔の写メをネットに流されたらどうしよう。

それが恐くて、メールを続けている状態になっていた。

この状態が何日か続いていたが、おもしろくなくなったのか、次の行動を起こしてきた。

それは、1番心配していたことだった。

その日、突然のモトからのメール。

「最近どーよ?♪」という件名に、「死ね死ね死ね死ね死ね」とだけ書いてある内容。

やることが幼い。だから中学生ってバカにされてるんだ。

呆れた。

でも、絶対何かをやらかしたな、と思ってなんとなくルイの作っているHPに行った。

するとそこには、明らかにモトがやったであろう内容の書き込みがされていた。

あたしの、本名。住所。アドレス。番号などの個人情報。

コイツかなりヤリマン、やりたかったらこの住所行ってみな、という感じの内容。

すぐルイにメールして書き込みを消してもらった。

気付いたのが早かったので、たぶん誰にも見られずに削除できた。

ルイが、誰がやったか調べてくれた。

やっぱりモトがやったものだった。

あたしはパソコンを切った。ネットって怖い。誰も信じれない。

シヨウからメールや電話があった。

泣きまくっているあたしを慰めて、落ち着かせてくれた。

ルイはモトにメールして、書き込みに対して怒ってくれたらしい。

でも、書き込みされるようなことしたアイも悪いと、ルイに言われた。

確かに全く悪くないとは言えないけど。

あたしは謝ったのに。

人って信じられない。もう人と関わりをもつことが嫌だ、怖い。

その時に、シヨウ以外のメル友との連絡を切った。

辛いときに、一緒にいて、声きかせてくれて、落ち着かせてくれて、あたしが安心するまですつと傍についててくれたシヨウ。誰よりも愛してるって思った。

ここでやっと自分の心も整理された。

ゲームはもうやらないってゆってたけど、シヨウにずっとお願いされて、

少しずつまたやるようになった。

あたしのこと、闇状態から救ってくれたシヨウ。

前よりも、もっと好きになっていた。

ルイにシヨウとの関係を告白して、あたしらは公認となった。

そのあと、ルイはマモと付き合うことに。

実は、マモとの浮気関係になっていたが、あえてばらさずに、2人とも心の中に

しまっておいた。

これからは、浮気なんてせずに、シヨウだけを見るんだ。

## ☆本心☆

全てが、うまくいきだしているとき、また1つ事が起こった。

「アイッツツ」

・・・ええっ・・・

話しかけてきたのは、レンだった。

あれからメールの返信はなく、話すのは2ヶ月ぶりだ。

この2ヶ月の間に色々あったので、あたしにはこの期間が長く感じた。

まさかレンから、また連絡があるなんて、信じられなかった。

もう連絡をとりあったりはできないと諦めてたから。

「本当にレン？」

何度も何度も確認した。

「信じれんのなら、今からメール送ってみようか？笑」

・・・本物のレンなんだっ・・・

メールの返信なかったから、もう嫌われたのかと思ってた。

また話すことができて、素直に嬉しかった。

レンのこと、あのときはもう全然冷めちゃってたのに、やっぱりドキドキする。

久しぶりだからか、ショウよりレンと喋ってる方が楽しい。  
また気持ち揺れ始めた。

「ショウ、レンがいるよっ」

嬉しくて嬉しくて、すぐショウに報告。

「あーうん、俺もさっき話したよー」

ちょっと不機嫌そうに返事をしてくる。

あたしが嬉しそうにレンのこと話してるから、嫉妬してるのかな。それもまたちょっと嬉しくて、ニヤけた顔が戻らない。

「まあ俺は、ルイのアド教えてって言われて教えただけだけど」

・・・

はあ。

レンは、ルイのアドレスを聞くためだけに、ゲームにINしたのだろうか。

あたしだけに話しかけてくれて、あたしのために来てくれたのかと思っていたので、

戻ってきてくれて嬉しい反面、ショックだった。

レンにルイのこと聞いてみたら、なかなか返事こなくて、ちょっとたって

「電話してた」ってゆわれた。

たぶんこれっきりで、もう連絡とることないと思うってゆってた。本当のどこ、どうなのか分からないけど、レンとまた連絡とれることがすごく嬉しかった。

けど、レンに対して、ルイのことでまだ嫉妬してる自分にビックリした。

あたしはやっぱりまだレンのこと好きなのかもしれない。

その日から、またレンとメールをするようになった。

ゲームにも時々INして、そこで一緒に行動することも多くなってきた。

それを見ていたショウは、毎日のようにあたしに言った。

「レンと一緒にいないで。また一緒にいるし。もう知らんツ」

最初は、嫉妬されていることに愛を感じて喜んでたけど、さすがに毎日毎日同じことを言われていると、めんどくさくなってきた。

ただゲームしてるだけなのに。



ゲームをいっしょにしてるだけなのに。

最終的には、ルイにも言われるはめに。

「レンはやめときな。前アイがレンのこと好きだったっていうのもあって、ショウも心配

してるんだと思うよ？」

分かってるけど、ルイには言われたくなかった。

マモがいるくせに、ショウやレンとメールや電話してるし。

マモが嫌がってるの知らないの？

あんたにだけは言われたくないってゆうのが本音だった。

相変わらず、ずっと心配して、ひどい束縛をしてくるショウ。

話せばケンカばかりという毎日が続いていた。

ゲームをすればケンカ。ショウとメールや電話をすればケンカ。

そんな時に、レンとのメールがあたしを癒してくれた。

そのとき、

「やっぱりアイに会いたい（＜―＞）」

久々の誘いだった。

ずっと会う気はなかった。

レンは今、あたしのこと好きってゆっててくれるけど、会って顔見て、

ブスって思われたら、あたしらの関係はここで終わってしまうから。嫌いになられて連絡とれなくなっちゃうことが嫌だったから。

返事に悩みながら、パソコンに目をやった。

まだ、ショウはレンのことについてブツブツゆってる。

めんどくさい。

「いいよ、会おッ（へへ＊）」

あたしはショウを裏切ってレンと会うことにした。

きつと、居心地がよくて、ショウに居座っちゃったんだと思う。ポツカリあいた、あたしの心の隙間を埋めてくれたから。

でもやっぱりちがう。

あたしはショウを、レンの代わりにしてただけ。  
自分の気持ちにウソはつけない。

やっぱりあたしは、レンが好きだっ。

## ☆リアル☆

レンは急にバイトが入ってしまったので、終わってから会うことにした。

あたしはその間に、お風呂に入って化粧をして、2時間前にはバツチリな状態にしておいた。

今は夜の11時。

あたしはベッドに寝転がって、パソコンにむかっている。  
やっているのは、オンラインゲーム。

12月頃に弟から教えてもらって、それから半年経った今日、  
あたしは、ゲーム内で知り合った1人の男と直接会うことになった。

「お風呂入ってくるから、またね」  
ショウにウソをついてパソコンの電源を切った。

レンから、バイト終了のメールがきた。

あたしは念入りに、もう一度ファンデーションとチークを塗りなおす。

まだ家の中にいいいよって言われたけど、緊張して落ち着かないので、風にあたるため、  
外にでた。

マンションの下に座って待つ。

あれから30分。まだもうちょいかかるらしい。

お腹が空いたから、レンにメールで、おかしの注文。

あたしは、通り過ぎていく車をジーンッと見つめて待っていた。

レンの写メは、1回もらったことあるから、なんとなくイメージが  
できている。

あたしもレンに写メをあげていたが、ショウに、

「アイの顔は、別に普通」とかってゆってたらしい。  
それを思い出して、ちよつとへこむ。

ヴーヴー・・・

ケータイが鳴った。

「どこらへん（へーへ；）？」

・・・迷っているらしい。

あたしは、レンに電話をした。

久しぶりに聞く声。

なんだか前と声が違うように聞こえる。

それだけ、長い間レンとは電話をしてなかった。

駅から左、ファミマを左、歯医者さんの横の・・・

頑張って説明をする。

でも下手だったらしく、ちよつと時間かかっている。

あたしが困っていると、そのとき、

「あ、みつけた」

と言って、あたしの目の前に一台の車が止まった。

電話を切って、その車にかけよった。

「おじゃまします・・・」

レンは無言で、買ってきたおかしを渡した。

ありがとって言って、早速食べる。

緊張して、話題が見つからない。

たまにレンが話題を出してくれて、それにちよつと答える感じ。

パニックって、おかしを食べる手が止まらない。

行く場所も決まらないので、とりあえずドライブ。

真っ暗で、あまりレンの顔が見えない。

というより、見たいけど見られたくはないから、見れないというのが本当。

けど、雰囲気、写メとはちがうような。

色々考えてるうちに、ドン・キホーテに到着。

店の中をグルグル。

歩くときに、手つないでくれるのかと思ったら、そんな素振りもなく歩いて行っちゃう。

歩くのが遅いあたしは、必死に付いていっててる感じ。

キヨロキヨロと色んなもの見てたら、いつの間にか置いてかれてる。レンの優しいイメージが・・・。

一通り見て回ると、何も買わずに車へ戻った。

・・・もしかしてあたし、つまらない女？

あんまこっち見てくれない。

やっぱムリかな、終わったかな・・・。

下がり気味のテンションのままドライブ。

ボケーツとしてたら、いきなり車がとまった。

周りを見渡すと、遠くの方に見える、キラキラのイルミネーション。

・・・と、近くに見えるたぐさんの墓。

恐いし、雨降ってきたし、なのになぜか「ここで休憩」って。

横のレンを見たら、イスを倒して寝転んでいる。

静まり返った車の中。

2人の間に沈黙が流れ、雨の音だけが聞こえていた。

「うう・・・」

お腹をおさえてうずくまった。

なぜかタイミングよく、出かける寸前に生理になってしまった。

出かけたあとになるよりは運がよかったのかもしれない。

あたしが、生理痛で痛がっていると、横の方から手が伸びてきて、お腹をなでてくれた。

・・やっぱりレンは優しい。

お腹大丈夫？って聞きながら、ずっとなでてくれる。

レンに触れたのが初めてで、余計にドキドキしてしまう。痛みが和らいできた頃、手が太ももの方へずれた。

「ちよつとっつっ」

ビックリして、笑いながらサッと手をはらう。

レンも笑いながら、次は胸に手が伸びる。

じゃれ合ってるうちに、緊張もほぐれて、だんだん打ち解けてきた。その時、レンはイスを起こして、再び車を走らせた。

バイト帰りだったので、とりあえずお風呂に入りたいらしい。

ちひろの家に向かうことになった。

行き途中、信号待ちのときに、軽くキスされた。

嫌じゃなかった。

突然のキスでビックリしたけど、嬉しかった。

## ☆経験☆

家に到着。

親が起きないように、静かに階段をのぼる。

レンは、あたしを部屋に案内してくれたあと、風呂場に向かった。時計を見ると、3時を回っている。

毎日、睡眠だけはバッチリとっていたあたしにとって、こんな時間まで起きているのは、かなり珍しいことだった。ベッドの上に寝転んで、落ち着かない様子でゴロゴロ。

30分くらいすると、レンが部屋に戻ってきた。

濡れた髪を、タオルで乱暴に拭きながら、ベッドに向かってくる。

「おかえり」

あたしは目をこすりながら体を起こした。

「寝てたん？」

タオルを床に投げて、フトンの中にもぐる。

フトンのはしの方をもちあげて、「おいで」と、あたしのスペースを作ってくれた。

あたしは急いでフトンの中に入る。

男の人の部屋で、しかも同じベッドで寝るというのは初めてだった。自然消滅になりかけている広島の彼氏とは、遊ぶ時は外かあたしの家だったし、

どこかに泊まって一緒に寝たりということはなかったので、今の状態がすごく新鮮だった。

緊張して、恥ずかしくて、あたしは逆方向を向く。

すると、後ろの方から手が伸びてきて、お腹をなでてくれた。

その時もう生理痛はおさまっていたけれど、レンの手はあたしを安心させてくれた。

眠くなってきた、ウトウトしていると、手がまたゆっくりと胸の方に。

優しく揉まれて少し声が出てしまう。

すると、手は下の方へ移動し、太ももを愛撫。

気持ちよくなってきた、ギュッと閉じていた足もしだいに緩む。

レンがそれに気付き、パンツに手をかけた。

「いや、あたし、生理だしっ・・・」

焦って我に返る。

しかしレンは、「いいよ」と言って手をすべりこませた。

そのまま指でやられちゃって、終わって見たら、レンの指が真っ赤。手を洗いに行くついでに、コンビニに行ってナプキン購入。

まさかレンの家に泊まることになるなんて思ってたので、用意してこなかった。

「生理の時は持ち歩けよ」と、つつこまれながら、再びレンの家へ。

ベッドに入って時計を見ると、もう朝の7時過ぎ。

2人とも眠たくなってきて、あたしはそのままレンの腕枕で眠りについた。

たまに起きて、また寝て、起きて、寝て・・・の繰り返しで、また夜になった。

レンは、寝ぼけてるあたしを、後ろからギュッと抱きしめる。

朝方と同じような雰囲気になり、今回は指だけでなく最後までした。しかも、ゴムはつけずに、中に出された。

最初は拒否ってたけど、生理中なら絶対妊娠しないって言われて、許してしまった。

気持ちよかったし、経験の少ないあたしにとって、したことないことを色々されるのは、

ちよっと成長して大人になった気分を味わせてくれた。



## ☆過去☆

今思えば、あたしの高校生活は大波乱だった。  
あたしは高校に入学してすぐに彼氏ができた。

でも、その人のことは別に好きだったわけでもなく、ただ告白されたから付き合ったという

適当な気持ちでしかなかった。

1ヶ月を過ぎた頃に、相手から別れを告げられた。

当然といえば当然か。

めんどくさくて、メールの返信もしていない状態が続いていたからだ。

来る者拒まず、去る者追わず、だったあたしは、そんな適当な恋愛ばかりを繰り返して、

ちゃんとした恋愛を経験したことがなかった。

1年の終わり頃、また突然の告白。しかし今回は、なんと女の子からだった。

隣のクラスのソラ。

あまり関わったこともなく、話をしたことも数回しかない子。

細くて背が高く、力が強くてスポーツ万能。

顔は普通に可愛いのに、男っぽい口調や行動で、どこかキツイ感じ。友達から、ソラはバイセクシャルだという噂を何度か聞いたことがあった。

まさか、その対象にあたしが入ってしまったなんて。

あたしには、そういう、女の子と付き合いたいという気持ちはなかったし、

別にソラを見てドキドキしたりすることも全くなかった。

しかし、告白されて、それを拒めないあたしは、ソラからの告白にもオッケーしてしまった。

最初は好きでもなんでもなかった。

「遊びにいこ」と言われた時も、普段、女友達と遊びに行く感覚でいるつもりだった。

チャリ2ケツでゲーセンに行ったり、クレープ食べたり、色々語ったり。

実際、女同士で付き合うって、分からなかった。

ふつうに友達として遊ぶのとは何が違うのかが、分からなかった。

そんなことを考えながら、最後にプリクラ撮ろってなって、中に入った。

2人きりになった瞬間、いきなり壁に押し付けられてキスされた。

あたしは頭の中が真っ白になった。

女同士でキスするなんて、考えてなかったからだ。

ビックリして拒むこともできず、そのまま舌を絡められ、されるがままになっていた。

その日から毎日、人目を盗んでは、ところ構わずキスをするようになり、

1週間後にはエッチもするようになった。

その頃から、あたしもソラのことを独占したいと思い出し、いつのまにか好きになっていった。

キスしてるのを見られたり、信じていた友達があたしらの関係を他の人に流すなどされて、

違うコースの人達や、ソラが前に付き合ってた女の先輩に、色々と陰で言われたりした。

そんな事があっても、あたしらのことを理解してくれて、応援してくれてる友達は

周りにたくさんいたので、頑張って耐え抜いて、あたしらの関係は1年半ほど続いた。

別れの原因は、浮気でもケンカでもなく、お互いの恋愛感情が薄れ

てきて、友達関係に戻ろうか  
ってなったのがきっかけだった。

ソラと付き合ったことによって、男との関係を一切断ち切られてい  
たあたしは、

高3になって、やっと処女を卒業した。

その相手が、今自然消滅になりかけている広島の彼氏の、テツだっ  
た。

テツとは、高2になってクラスが一緒になり、席が前後で仲良くな  
った。

何度も何度も告白されたが、「好きな人いるから」と言って毎回、  
断っていた。

それでも、指輪やネックレス、ブレスレットにピアスなどを、手紙  
と一緒にくれて、

一向に諦めてくれない。

色々もらっているままも悪いと思い、あたしはソラとの関係を告白  
した。

諦めてもらう、唯一の方法だった。

ひかれるかもしれない、気持ち悪いと思われるかもしれない。

出来れば、こんなの知られたくないし、言いたくもなかった。

でも、このままの状態はテツに失礼なので、勇気を出して言ったの  
だ。

テツは、ひきもせず、理解し、納得してくれた。

そのことを知った上で、もう1度言ってくれた、「アイが好き、待  
ってる」。

ソラへの気持ちが薄れてきてる頃から、夜中に家を抜け出してテツ  
と会ったり、

キスしたり、途中までのエッチをしたりしていた。

ソラとの関係が終わり、そのあとすぐテツと付き合うことになった。

遊ぶのは外が多く、付き合ってからにはキスすらまともにしてなかった。

1度だけ、あたしの家にテツをいれた。  
それがあたしの初体験の日になった。

それから高校を卒業して、私立大学合格が決まったあたしと裏腹に、公立の大学を選択した

テツは、まだずっと学校へ通い、会えない日が続いた。

それで寂しくなあって、オンラインゲームを始めて、レンを好きにな  
って、彼氏に冷めた。

あたしのエッチ経験は、テツとの初体験のみで終わった。  
内緒にしていたが、レンとしたのが人生の中で2回目のエッチだった。

まわりにも、初体験がまだの人とかたくさんいたけど、  
1回しかしたことない、経験が薄いあたしも、正直焦ってたんだと  
思う。

まだ付き合っていない、しかも初めて会ったばかりのレンと、エッ  
チしてしまったことに、  
少しだけ後悔をしてしまった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3835b/>

---

蓮華～renka～

2010年12月14日04時19分発行